

田口 卯吉著  
日本開化小史  
卷之六

210.1

Ta157m

t



田口卯吉著

日本開化小史



田口氏藏版

日本開化小史卷の六目録

第十二章

文學進歩の景況

文學貨財の進歩常々小遅速ありと雖も大体小於ては併行す

二千四百年代の文運と撥乱反正二千五百年代の文運と守成修補

封建開化の性質（上下懸隔重族）

社會を自ら救治を爲す

社會の發達は草木の發達に如く之と發達せしむるの方法觀やそし

210047

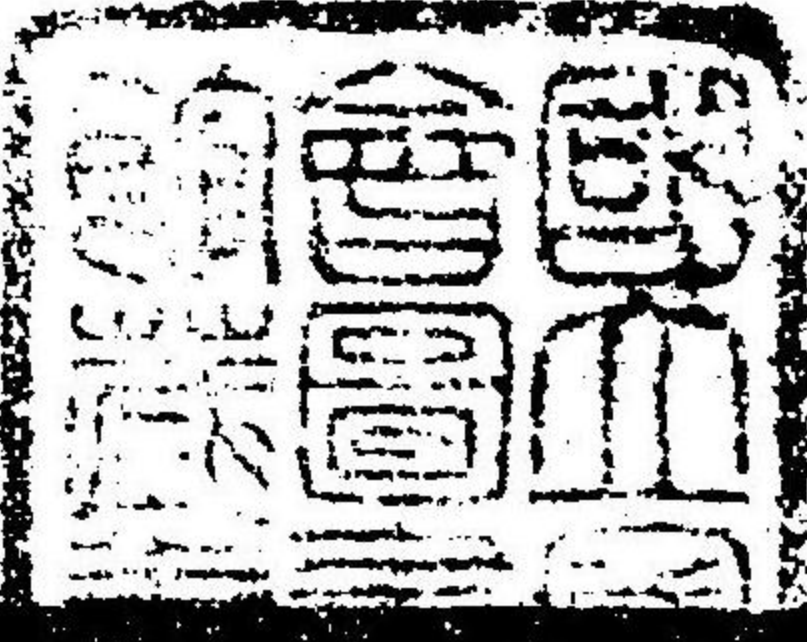


田口卯吉著

日本開化小史

国立国会  
25.10  
図書館

田口氏藏版



日本開化小史卷の六目録

第十二章

文學進歩の景況

文學貨財の進歩常々小遅速ありと雖も大体小於ては併行を

二千四百年代の文運と撥乱反正二千五百年代の文運と守成修補

封建開化の性質（上下懸隔重族）  
社會より自ら救治を爲す

社會の發達は草木の發達に如く之を發達せしむるの方法觀やそし

210047



第十三章

徳川政府の不利なる勤王心の發達

謀反の口實

忠義心の封建制度より利あるを為りて發達する

忠義心の發達して徳川政府の不利となる

歴史、和學、儒者、勤王心を鼓舞す

勤王心を徳川氏を倒るるに足らざる之を倒るる外寇より

あり

愛國心の勃興

徳川政府、天子の詔と以て開港せんと欲す

此策成らざりて徳川政府之を専決す

諸侯の志士天子と奉じて攘夷を行はんとす

御上洛の失敗

各地騷擾

長藩と討して勝たる

將軍政權を奉還す

將軍恭順謹慎

輿論坑をべからざる

外交一たび開くことなきを徳川氏の制度復た維持

すべからざる



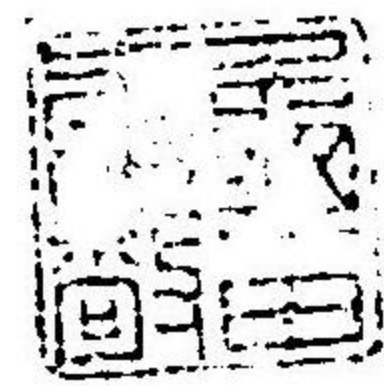


日本開化小史卷之六

第十二章

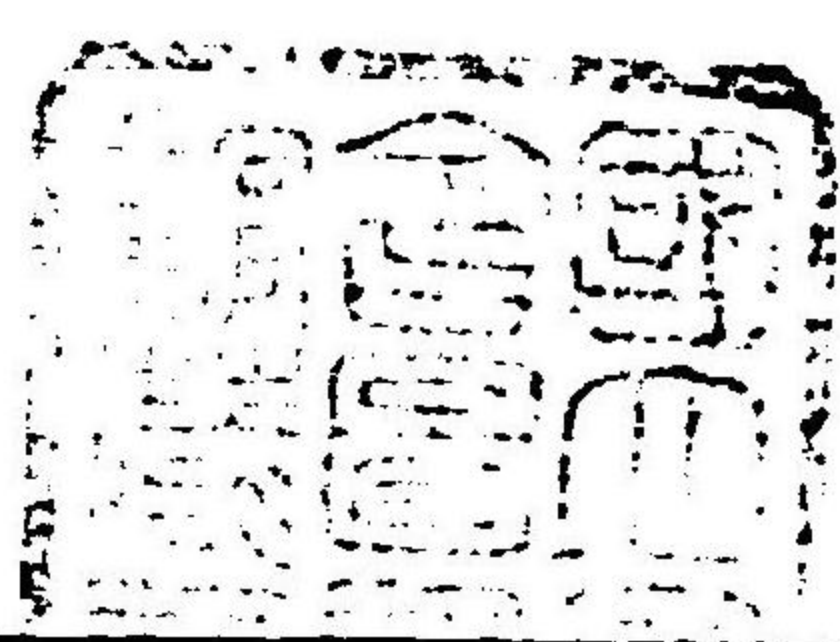
徳川氏治世の開化の現像

田口卯吉著



石の如く外物の有様進歩せしむるが心裡の有様亦發達せしむるを得る其景況左の如し

國戰



文學の概況  
戰國の時小當りて下野  
足利の學校ありて金澤  
文庫ありて京都五山  
寺東福寺天龍寺相國寺  
壽寺ありて文藝學と保護  
り補助ありて若くハ管  
補助ありて若くハ管  
所領ありて若くハ管  
と見えりて若くハ管

事ハ久ク宣く僧侶の司  
り平顯の文人と和の文  
皆圓顯の文人と和の文  
社會小行り就中禪理尤  
社會小行り就中禪理尤  
社會小行り就中禪理尤  
武人無識者ありて  
願ハ人無識者ありて

日本開化小史 卷之六 第十三章







二十二年六月三日 秀忠 家康 (將軍) 慶長 元 寛政

儒庵て所詩山くとい惺  
た五四天羅とと書弘用窩  
るふ山の王山称能數羅ら第  
まの長と松そく百山社赤  
れ皆老云永堀部博大小羅  
る儒小尺杏我あ學小羅  
の學朝五庵國強程山  
説ひ山と那中石記朱德  
と終意称破興川の川  
奉林活の大學氏

記文百名法云其と更小著其との曲  
入の年醫とふ功雖被撰門墜子直  
す續代傳奉蓋偉と詳と山出を純正 醫  
悪人本不明を能茂岡元々各時世の 學  
一抱故朱と醫へ一醫國の相子  
ゆとを好丹丹籍俗把風譯俊續正  
えも二)溪溪と士廉の彦て紹  
茲今千皇の浜解蒙至然書多家正  
よま四國治とそ生り世とく聲紹

二十四年 將軍 家光 家綱 家宣 吉宗 (年號) 寛永 正保 慶安 承應 明暦

乱卓書朱鹿コもあ傑て千と雪世澤小威府亦林  
の見外子素必れら各四以山の蕃野の朱羅  
為多書非行と欺ぶく百て鹿名山中)祭子山  
り大斥聖其蓋て一年著素あ兼是酒のの 朱子學  
小思學一經も宋一尋方代ハ行りり山時と説子  
壅ふ或蕃要深儒所常のる江皆あ小ふと春齋  
塞に問山録くの謂讀振初此戸經て當の奉齋  
せ久等との奉説活書ひり四共不濟備り其徳子  
ら一頗集著せを於か人あ當く軍井以土愈川鳳  
た戦ふ和程山けふ小俊り二學正く熊佐政岡

於祇新直間第代なそと侯来此ら輩揚菴舉が其始の  
て園井方齋ののと水集光り時か皆齋貝とと後う日  
く南白浅門頭赤是戸り園水明而碩五原んり宋て本  
安海石見まハ小とのて學戸の | 學井益小今儒勃の  
積柵室綱くる至以文以と小人て大持軒山其の興智  
澹原旭齋三、りく學く好聘朱其儒軒藤崎重學 | 力  
泊篁巢木宅まて二是學みせ舜著と五井開ふ愈た茲  
齋洲兩下重ひ是十と問和ら水述以井懶齋のふ小  
三水森門固甚等)と漢は我亦て蘭齋木も盛も至  
宅戸芳と佐多の百威獎の水國多称州仲下のんれり  
觀洲入藤子年ん励書戸よ | せの村順成ふて

日本用七いせ 卷六 第十三章

日本用七いせ 卷六



萬治 寛文 延寶 天和 貞享 元禄 寶永 正徳 享保 元文

瀨皆朱學を奉す

復古學

斯く漢學を注し又盛んを興ふは其の然るを以て復古學と云ふ也其の源流を考へて之を論ずるは其の難しき所なり其の源流を考へて之を論ずるは其の難しき所なり

又一家言と立つ宋儒の學

經濟學

熊澤蕃山の太宰學或は物産學と稱す其の源流を考へて之を論ずるは其の難しき所なり

開化史

白石卓見の著る所は其の源流を考へて之を論ずるは其の難しき所なり

第二章

其弟子並に河内天等祖其

其弟子並に河内天等祖其... 漢學を注し又盛んを興ふは其の然るを以て復古學と云ふ也

和學

此下河内天等祖其... 漢學を注し又盛んを興ふは其の然るを以て復古學と云ふ也

四















諸家と考證を拆長と鳴ふるに以後  
居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
明の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
山の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
古の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
平の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
蘇の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
修の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
子の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
ての功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
春の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
との功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
平の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
えの功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
既の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
此の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
蘭の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
金の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後  
所の功居多文考證を拆長と鳴ふるに以後

伎村取魚彦本居宣長桶  
長博其學有益古事記多傳  
著第執平儒佛併擊和學  
其固執平儒佛併擊和學  
蓋も茲に儒佛併擊和學  
と實に儒佛併擊和學  
り伴作事師の功に因る  
多著村田春海卓見て  
後江村の道代漢匠藤千  
茂春の海心代漢匠藤千  
そ氏への道代漢匠藤千  
す思ふらく我の國太古道  
之服支那の食等取至和  
不支那の食等取至和  
典故の支那の食等取至和

善世安井息軒芳野金陵朝の川

和學  
荷徒と春滿の極て授其子御  
風和學又復古の満り多此御  
時和學又復古の満り多此御  
茂真淵荷復古の満り多此御  
學和歌亦古葉の満り多此御  
倣文流亦古葉の満り多此御  
國者等日然古葉の満り多此御  
徠春臺翁本然古葉の満り多此御  
弟と云我固淵本然古葉の満り多此御  
為ありと云我固淵本然古葉の満り多此御  
道ありと云我固淵本然古葉の満り多此御  
學ありと云我固淵本然古葉の満り多此御

二文亦大五百年進代  
文亦大五百年進代  
張衣浦此海也  
鶴俳文並狂文  
ふ蕉門の諸子勝其體  
ふ蕉門の諸子勝其體  
來山代平覺又都人太  
田南人代平覺又都人太  
三南人代平覺又都人太

目才開ハハハ 卷六











表中遺漏尚ほ多し後の人此書を以て棄つべしと爲さる希くは裨補せよ

以上の二表小據より徳川氏の時文學の進歩と貨財此進歩と併行せしこと代知りし然まとも其間貨財先づ進みて而して文學之小續きしものきあり文學先づ進みて而して貨財之小次きしものあり又其時代は就きて考ふる小貞享元祿の時代は其進歩の勢最も速ふして其以後少く遲滞し又更に文化文政の項に至るまで次第に増進の勢を示し蓋し社會事物の整然として一列と爲ちて進行すべし社會の理ありと雖も其細目と就きて查察する未だ必らずも小遲速な

くんはあらに然まとも此事獨り社會の理に於てのみ然りしならん凡そ外物の理を仔細に講求せし皆此の如きものあり夫れ惑星の大陽を廻りて速心力と求心力との關係は出たりしものなり其行道を必らず真圓と爲さざればとみし思ひふらざる然りし其行道全く橢圓と爲せり燈火の滅するは油の盡くると因るものなりハ次第の暗くなるんとみし思ひふらざる然りし其滅するも臨むや却て明光を發する斯の如き類は事物理に於て極めて多し皆力の一様なりして遲速強弱あるに基りしを得ず然らば則ち社會の進歩と社會の理ありと雖も其進歩は緩急遲速ありし勢の免まざる



所なきべし是れ則ち徳川氏の時貞享元祿と文化文政  
との時と於て最も隆盛を見る所以ならん然れども其  
全体の成跡と顧みれば足利氏季世の浅き一も有様と  
して徳川氏の燦爛も開化を發せり社會進歩の理  
亦明らなるや蓋し此等の進歩は嘗て政府に保護を  
因らす又嘗て外國開化の助と藉らる全く日本社會に  
内は於て自ら進みしものあり後の世に國事と憂ふ  
もの此二表に熟見せらる或る以て干涉保護の迷と解ら  
ん歟

蓋し二千四百年代の進歩は人目小耀燦たるものあり  
儒者も於ては其俊才ふ、熊澤了介、物徂徠、新井白石等

の人あり俳諧も於ては其巧妙ふ、芭蕉、其角等の人も  
あり佛も於ては其深奥なる深草元政の如きあり狂言作  
者も於ては其新機軸と發する近松門左衛門、岡清兵衛  
れ如きあり淨瑠璃も於ては即ち竹本義太夫れ如きあり  
り役者も於ては初代團十郎の如きあり皆英邁豪傑の  
資ありて長く後人の尊崇を受くもの人も其貨財上  
の進歩も極りて著し其小前表に就きて見らるべし蓋し  
二千四百年代の進歩は我國戰國の爲り小久しく壓下  
せられたる文運の太平の時雨を得て俄に勃興したる  
う如き勢を示すものありなり二千五百年代の初り小  
當りて此等の諸子死亡後文運稍遲滯の姿ありと



雖も其末小至るゝ及ひて更に駿速の勢を以て第二の  
進動と現せり儒學小於てハ早く折衷れ學出て舊時の  
固陋ふゝ諸説と排除し終ゝ山本北山太田錦城中井竹  
山佐藤一齋頼山陽安居息軒の輩見識と文章と成以て  
一時と風靡するものあり和學に於ては加茂真淵本居  
宣長村田春海の輩あり古代の事實と探くり語音と正  
まり天文學に於ては麻田剛立伊能東河金子半七郎の  
輩ありて深く天空の外と探くり小説に於てハ京傳馬  
琴阿多て文筆の巧技と誇まり俳文に於てハ也有狂文  
小於てハ風來蜀山の輩ありて一種ハ新文代起る皆博  
識よりて新機軸と出ると人なり其他貨財の進歩せし

もの亦極りて著し今特ニ此等の人物に就きて品評と  
下さん小讀者多くて二千五百年代の諸士と以て二千  
四百年代の人物に劣れりと為さん歎是也蓋し其事業  
の人目小著しものあり加為りなき開化の度に至り  
てハ二千五百年代を以て優れりと云はるゝふらす  
蓋し二千四百年代の諸子々皆創業の人なり其爲を所  
多くて文學上の撥乱及正れりものあり故小功名人目  
に著し二千五百年代の諸子に至りてハ其餘を受て  
其弊と去り其美と勸り以て能く社會小適合せしめた  
り故に其功名前者に及ぶと雖も其智識小至りてハ  
遙小之に超ゆるものありと云はるゝ一らら矣殊小



說俳文其他此時代に至りて創業せしめ極めて多し  
文運を決して退却せしむるありは、なを抑も文明上  
の人物と論ずれば時と一技の優劣を就きて查察せざる  
べからざる然らば則ち二千五百年代の人何ぞ二千四百  
年代の下にあらんや斯く一般の進歩を就て查察した  
るの後更ふ其開化の性質と略記せし蓋し以上の開  
化は皆封建制度の下に發したる開化なり故に封建は  
社會に適すなれば形状を存せり今其理由を述べん抑も  
封建社會は、大國を領する所の數多の諸侯あり其次  
ふは數多の階級あり成る所の武士あり其下は、商あり  
り工あり農ありと農と工とを固より貧困は種類にして

諸侯を固より殷富の種族なり其中間立つ所の士と  
商とく其階級極めて多くて富むるものは王侯に比  
そへく貧乏もれも農工も下き、抑も徳川氏治世  
の文運を斯く種族の需要を基きて世に現はる、所な  
れは其度れ相懸隔する亦極めて多し故に其讀書に於  
んふや王侯富豪は古聖賢の名を眩し専ら學士と引こ  
て孔孟の書を講せしむるた、か為りし六經を明くをふ  
徂徠仁齋北山錦城一齋等の如き學士は輩出せあつた  
りと雖も中等以下の人民は之を以て産と破の基と  
爲し固く之を禁み僅に商賣往来都路今川の類を以て  
其教育を充てざる其和學を於け、や王侯富豪は古代



の語を貴重し學士と引きて専ら古事記萬葉集等と講  
 せしむるを為し古辭に明なる真淵宣長の如き學士  
 と輩出せしむる事と雖も中等以下は人民を百人一首  
 を以て極度とせり其文章に於ては王侯富豪を専ら漢  
 文代重んじ古辭と解するもの代稱揚するもの之を明  
 らふは徂徠南郭の輩と現出せしむる事と雖も中人以  
 下も之と解をなしたる能はざりし其和文に於ては王  
 侯富豪を古事記ありしれ奇古れ、語を用ひて文章と  
 綴ると博識とて尊崇せしむる之に巧みなる真淵宣  
 長の如きを輩出せしむる事と雖も中等以下は平假名  
 の草子に安んぜり其画に於ては王侯富豪の賞觀玩味

して始めて能く其趣を解する事氣意ありしもの好  
 みて南州の画専ら行ひし之を能くするもの池大雅の  
 如き代現出せしむる事と雖も中人以下は錦画を以て  
 其樂と為せり其書法に於てはや王侯富豪を唐様と重  
 んし之を能くするは廣澤東江の如きと輩出せしむる事  
 と雖も中人以下は皆御家流を用ひし其器具に於ては  
 其居宅に於ては其服飾に於ては其他一切の開化に  
 於ては王侯富豪の用ふる所も其度極めて高く是て  
 而して中人以下の用ふる所も其度極めて卑し其  
 度の懸隔せるのミならず殆ど性質を異しせり蓋し社  
 會の平等ならはざりし社會の常なる尊卑に用ふる所



相異ふこと固より免からざる所なきも封建の時代如く甚くはあらず一而して封建を以て太平を致せし事徳川氏の如きも古来各國稀に聞かざりしや此の如き學士を發生せんと欲するも望むべからず此の如き器物を發生せんと欲するも得べからず開化の理は窮めんと欲するもの其然る所以に於て最も注意せざるべからざるなり

且つ更に注意をせしめし一事あり封建制度の下に於て發するものハ皆封建の性質を禀くる事是なり蓋し酒

中より注きたる凡ての米を皆酒と化せし磁石も接ふべし凡ては鐵を皆磁石鐵とふるべし封建制度の下に發したる凡ての現像を皆封建の性質を得試みし見よ徳川氏の内制と各諸侯の内制と全相同し各諸侯の内制と各藩士の内制と全相同し各藩士の内制と各商賈の内制と全相同し各商賈の内制と各伴頭の内制と全相同し是より以下連綿として皆同し皆僕隸家來を以て團結して一家を為せしものなり蓋し封建ハ族を重んずるものなり故に長子と重んじ庶子と輕んじ假令継嗣に愚者ありても雖も綿々とて一族を以て永遠に傳へしめんとの計畫極めて密なり其極や其族







此の如く英雄豪傑の爲る所或は其勢と早め或は之と  
遅延せしむる小過さざるを嗚呼此理を推して将来  
と察せり我國前途の事亦豫知する事と得べきあり  
且つ夫れ社會の發達ハ他の有機諸物の發達と異なら  
ず今草木小就きて之を例せん抑も草木の性を保又保  
生避死の天性を存すふを爲りし其生長するや疑ふへ  
ららずと雖も之と養ふと種々の方法以て之を以て  
堅韌ならしむべく以て柔弱ならしむべく以て長大な  
らしむべく以て矮小ならしむべく之と同く社會開  
化の發達も多々社會の性なりと雖も之を養ふも王朝  
の制度と以てするも鎌倉政府の制度を以てするも徳

川政府の制度と以てするもとふ因りて文學貨財の風  
俗人情不至りて皆異様の稟性と得せしむたり是れ  
由りて之と觀りし社會の制度と立つるもれは恰も園  
丁の草木と育する如き歟嗚呼如何なる有様と於て  
草木最も長すふやを知らず社會發達の如何なる制度  
の下に於て最も速ふやを知らずこと難うらふなり



第十三章 徳川治世の間勤王の氣を發せし事

我國開化の斯く進歩せし際ふ於て徳川政府の爲す不利あり一元素の發達一來りそのあり其の如何と云ふは王室と尊ぶの氣風大に増進せし事是なり蓋し徳川家康の禍亂と戡定せしゆりや深く王室の將來を懼るべきものありしかば知まらざれば表面より之を尊重せしむるが如しと雖も内實を全く之を抑へし固より戰國潰爛の折ふ比すれど王室ハ一唾れ勞も自らせらざるごとく衆庶の尊崇と受け數多し俸領とも得玉ひし事なれど幸福は度へ天壤の差ありと雖も人智漸く古來の歴史は是非を及ばず徳川氏も萬般の政

務を親らし王室を全く虚位と推するが如き姿ありて見て王室と舊時より復せんとする志の發するも人情の常なり是れ家康の豫り防かんと欲したる所以なり然れども此心の進歩をふ又一朝一夕の事にあらずき彼の二千二百九十七年徳川三代將軍治世に時肥前島原に耶蘇宗の亂あり其張本たるその素と大阪の殘黨よりして初より徳川氏の政體を破壊せんとの精神を出てたつものありと雖も其口は藉きて以て人心を回結せしめんと欲する所のその即ち勤王はありて耶蘇宗はあり其志は英雄の士其志の成らばは憤り政府に向いて干戈を試みんと欲するものは必矣輿論の



投すへき不投すく一若し夫れ當時の輿論果して勤王  
 不切ふきを何ぞ取て之を口不藉かさんや然る不其  
 茲より出てすりて耶蘇宗不據る以て當時勤王の説世上  
 に洽うらさるしを知るへし其後十四年を経て二千三  
 百十一年に至りて由井正雪丸橋忠彌の亂ありて正雪固  
 りを死と恐れを以て臭名を萬世不傳へんとすはまの  
 なれを若し夫れ勤王の説よりて當時不威ふるん不  
 何ぞ之と口不藉きて人心を固結せしむはることあら  
 んや然る不其口不藉く所のもの之より出てを以て却  
 て徳川氏の親藩紀州公に謀反し詔を是れ又以て勤王  
 の説未だ盛んふるはるしを知るへし然るは其後太平

久しく打ち継ぎしは當時の世体は最も必要なる教  
 則訓言の自ら發するを自然の勢を徳川政府の組立  
 と封建制度なきを封建制度を破るものとして不忠れ心を  
 故に忠義の教太平に久しきを不従ひて社會不發成した  
 り漢學の旺盛不至る不及びて其碩學鴻儒愈々之を鼓  
 舞せしり蓋し孔子の教を素より封建の時より發したる  
 ものなり社を其君臣に分義と説くと恰も善く當時社會  
 の結構と鞏固ならしむる不適をはものあり加之物ハ  
 見よその地位に從ひて異なるものなきを徳川時代  
 不行之社たる孔孟の教を忠義の事と切あること却て  
 純粹なる孔孟の教を甚しきものあらはし如しるる



其所謂忠なるものは君に為りし其身に顧みざるは意  
なり其所謂孝なるものは父の為りし痛苦に厭はざる  
の謂ひなり蓋し是れ中庸を得ざるは此のありし  
る一然れとも封建制度を維持するを能く全く此心  
なきは時世の移るに従ひて此心愈々感んばりき然り  
而して英雄豪傑は士大夫此心と鼓舞するものなきに  
あらず二千三百五十二年の頃水戸黄門光圀大に此氣  
風を鼓舞せり蓋し光圀の主義たる王室を尊崇し皇統  
の正統を立て佛教を排し臣民の分義を明しすふ  
あり故に大に我邦の古藉を集り以て大日本史禮義類  
典の類を作らるる又朱明の遺臣朱舜水と重聘して漢

籍を勸め孔孟の儒道に據りて頻りに忠義の教を奨励  
せり然り而して最も社會の人心に大感覺あるを楠  
氏の墓と湊河に建て嗚呼忠臣楠氏之墓と記せし事な  
り是より先き楠氏の名望未だ世に顯るる唯一二の儒  
者舊史を讀み其事跡を見て之に欽慕するありのみ然  
るに光圀の楠氏に墓と湊河に建てしを村童牧兒も  
楠氏の人とありと知り勤王と人事の最も榮譽ありと  
れり此事を解せり其後久しうして二千三百六十一年  
に至り赤穂の臣其主の爲りし怨みと報せし事あり其  
事情の憐むべきと其進退の整備ありと因りて海  
内一般其人とふりを慕へり俳諧師も俳諧と讀み戯作



者も忠臣蔵を作り儒者を義人録と著し歌人詩人各々其長を以て其行為を賛美せり而して忠義は行ひ社會も尊ぶる時代なきを世人皆其刑に處せらるるに代惜まはるものふらざる

此時代の前後も當りて彼の徳川氏並に諸侯の内部に起りたる騒動も大に忠孝の氣を鼓舞せり夫れ亂臣賊子の君家を亂し實に封建制度を破潰をほすの故に封建制度の時も當りて大逆無道として非斥するもれ之も過く、ふ、彼の姦計を企てては惡人等々世人舉りて之と惡み其騒動と静りたる忠臣を世人舉りて之を賞したるを社會の風教も愈に封建制度に適し

て發達せり

此時も當りて更に其勢を助くともれあを演劇淨瑠璃小説等の盛んに世に行はれし事是を是等のものとして固く當時社會の風教が變へんと欲すを此卓見を以て作り出せりものあらざる全く社會の風教と其儘に寫し出せりそのとて見るべきふるんは其所謂勸善懲惡の主意たる一も唯當時に行はれし世論を示すも過さずと雖も忠義の氣益々勸むものありたり其記する所を見れば上は王室將軍諸侯の事より下は武士商人等の事に至るまで必も臣僕の内も惡人ありて其主家と覆し主人庸愚にして而して後忠臣出て、



數多の痛苦を嘗め其主家を改復したる此歴史なり大凡世人の感覺と發揮するもの此等其著作より甚きものあり此等の著作と見聞するものは皆其惡人を見て憎み其善人と見ると憫み切齒扼腕するに至るその多し當時の著作をば惡人と非常の惡善人を非常の善人と共し人情も近う、らうと雖も當時の人情又粗なるふしを能く之を感奮せしめ得たりと見えたり

さしを社會も行く、輿論も常し英雄豪傑は首唱しなふう如くと雖も其實も當時の一般人民の利益ありその外ふらふはれり忠義の教何故に利益なきし乎是れ則ち當時の制度も封建制度に在りて君臣の關係と

以て社會を立てたり折柄は此を忠義の教と最も之を維持をばも適す此ありしを彼の勸善懲惡は世の教の如きも必し聖人の作りたるものふとあらて愚夫愚婦の輿論集まりしものと思はる

斯く忠義の説社會も發揚するも及んで大に徳川政府の封建制度の衝突もこれ結果と發せり何んとふれり我國も於て忠義主義の最も大なるものと徳川氏も盡くもあらうして王室を尊ぶるありはとて歴史の明くもふも從ひて一般人民も知らざればなり彼の光圀もこの意ありしを蓋し君の忠と盡すは善事なり



と知り而して人君の最も貴きものと天子と超ゆるふ  
とと知、故に忠と王室と盡せしものば尊ひあり赤  
穂の義士の行為の如き其他演劇小説に記載する忠義  
の士は行為の如き皆其君に忠れりそのなり其君に  
忠ふれ封建制度を鞏固なふと雖も其君に君に  
忠れざる其事竟ふ如何なるや蓋し忠義の教愈と  
社會に著りた古昔王朝の威んあり歴史愈と人智小  
顕る、とふは其所謂忠義の氣を其君に於てせし  
て君の君に於てす法の正理を多事と思はむと固  
くを理學の上より論するときは其君に君たるものと  
全く我ふに因縁なきものなるべしと雖も人情の感觸

と決して然らざるなり且つや人類貴賤の考え大に其  
勢を助くるものあり蓋し人情の尊敬する所ハ親し  
らぬもれ小發するものなり抑も賢不肖の差を左する  
甚しきものありあらざる相親をむとふは尊しと思  
ふ程の人とあらぬものなり其名聲を傳へ聞き  
て親しく交り事のならぬととて與床しく思ひたて自  
ら人として尊重の念を發せしむるものなり貴尊の念  
又生と保  
理由を第四章世四葉に詳なりされり王室の平安の  
都に在りて凡て世間の政務に關係し玉す深く隱退  
せられざる有様を最も世の尊信を誘くの原因となん  
と殊小神代荒蒙の時より連綿として正經を傳へ玉ふ



こと當時の歴史を明うがれ我日本天子のたれを  
り普天率土王土王臣ふあうのち中葉頼朝等黠  
の才を以て王權と攘み終山將軍政府の基を立てた王  
と雖も真正の神權と王室をあらうの考へ漸く人民の  
間へ發生せり

此事の第一の原因を和學に漸次開きて神道の隆盛  
なりしを始まると蓋し神道の説たりや王室の衰へ鎌倉  
政府興立の頃よりして体裁と為すに至れり後鳥羽院  
の時代の<sup>十</sup>百年<sup>九</sup>中項ト部兼直神道大意と著せり其後度會家  
行類聚神祇本源と著る南北朝の戦争は時北畠親房元  
元集及び神皇正統記と著る是は於て乎神道稍く形体

と為るそのあり其後足利氏より戦國に移りて神道全  
く衰ふ書の見よへるふ徳川氏海内と静定すふ及  
ひて儒者よりて我國の古事に注意するその兼く之と  
研究より林道春山崎闇齋新井白石の輩皆著書あり而  
して闇齋の如きと深く之と信せり然り而して和學者  
真淵本居平田等の諸子又熱心之と主張し我國を神國  
ふとて神の御子孫と天子と登り玉ふ世界無比の尊  
き國なりこと代人に知らるたり斯く神道に進む  
に従ひ皇統と貴ふの氣従ひて盛んふれり宗門は熱  
心するもの何ぞ理論を闡せん我皇室の御祖先は神ふ  
りとの一論を迷信して勤王の氣又之より發生せり



れ々忠義の氣よりきて終ふ勤王の氣と發生したり此氣漸く鬱結し終ふ高山彦九郎蒲生吾平の輩小至りて最も王室の凌夷と歎き諸侯の説き士民と鼓舞して身命と顧みざるの熱心を示せり

二千五百年代の末に當りて儒者中又大に此の如き議論を主張したる者あり其人誰と云ふ賴山陽則ち其人なり蓋し山陽の主張せし所を神道と其主義を異しして却て神道と駁撃せしり然まとも其王室と尊崇せし小至りて遙に之に過るたり彼れ新井白石の讀史餘論と讀み皇朝の衰へ武權の興立する所以と知り頻りに之と慨歎し又楠氏の勲功を賞讃して其業の終り成

らざるを哀み徳川氏の政權と擅し王室の虚位と擁護するを以て時勢の止むを得ざるものと言ふぬらうし論たり蓋し新井白石と古来の俊傑よりて能く開化の理と知れり故に古來政府の興廢する理を説きて徳川氏と經緯せんと云ふなり賴山陽は即ち其事實に依りて更に勤王の主義と説きて識者或は其行為と答むと雖も亦一世の俊傑と爲さばを得る況んや日本外史の一たひ世に顯れしを海内一般勤王の義と知り志士靡然と爲て之に向ふの氣と發揮せしむ於ては或も眞に山陽外史の著書に如きと海内の人心と鼓舞せし事古來無雙と云ふべきあり著書と以て人心



と鼓舞を以て得、此の如き小至りしは蓋し又時世の隆んぬに因らすんをあらす

然るとも此時不當りて所謂勤王の氣なるものは未だ以て徳川政府の結構と破壊をるの勢力ありしその小あらざるをあらす然る小不慮の事件發出せり其を何ぞや二千六百年代の初め二千五百十三年也米洲の黒船太平洋と越えて我浦賀に著し通商貿易を請求せしふことは是なり是より先き外國の通商を三代將軍の時より固く禁止せられたる海内一般殆んど日本に外に國ありを知らざるを而して唯其名を聞くその支那朝鮮琉球の諸國にのみありし彼の佛祖に本地に天竺の如き

と或は天空の外にありしと思惟せし者なり此時に當りて外國數く我邊海に寇せしふあり去る二千五百年代の後半に至りて外船の我近海に往來するその數くふりし然るとも皆我邊僻の地に上陸するのこあり故に唯當時遠大の志ありしを以て之を代忿怒せしむる小止まり然るに米船の我に到りや其入る所を則ち江戸近傍の地なり其求むる所は則ち條約を結んで通商せんこと代請ふるを事大に前者小異れり而して彼れ之を要求する小強迫の意を以てし若し之を許さばれ直ち小兵力に上り訴へんと欲する其威を示せり



此の如き人民小對して此の如き事件の發るは最も  
其膽を破るは不足なきあり王室も直ち小巫祝僧侶  
小勅して外人の退去を祈り免幕府へ直ちに炮臺を  
品川沖に築き諸藩に令きて武備を嚴し且つ其の得  
失と建議せしり加之洋語に通するものをして外國の  
事情と質さちりたり

蓋し深暗の中よりありて忍ら光輝を見ら直ち  
小眼を開く能はざるなり彼の太平洋中れ最ふは一  
孤島の内に閉居して絶えて海外異邦の人と交通せさ  
るる人民にして此の如き事變に逢ひ其心神の惑亂を  
るる抑も又理なき小あらはるなり其第一の恐懼ハ外

國と交通するとす彼れ直ち我國を奪ふ一と小あ  
り蓋し愛國の念を國に關する事件の生やるとは發  
するもれなり忠君の念を君に不利なる事件の萌や  
り起るものなり今や外國將に我に交通を求め我國  
を奪はんとすは恐る人心を發しり是は憂國の  
心非常に鬱勃なり蓋し人心を其自ら苦きとしかふ  
切り自ら慰むべきなり其自ら恐るるときは切  
り自ら強さう如く云ふそのあり其自ら危るを覺ゆ  
るときは切り自ら尊大にして他の強者と罵詈する  
ものなり彼の外船の我國に入らや其船艦の巍然と  
る大なる其砲銃器械を整然とて精ふる其兵制進退



の嚴然として静うふる固より以て我國人を懼まざる  
 小舟のみに我國の砲銃と火繩銃のそ我國の兵制ハ二千三百年即ち元  
 龜天正の頃れもののみ故に如何に我を彼より強しと  
 志て自ら慰めんを欲するも一も之を慰むべきは點あ  
 りない唯一の慰むべきは當時盛ん小發達したる日本  
 と神國ふり日本は天子を神孫たり夷狄禽獸と同し  
 らざるの一事あり水戸の會澤正志著新論曰く謹  
 天日之嗣世御宸極終古不易固大地之所出元氣之所始  
 紀也誠宜照臨宇內皇化所暨無遠不通矣而今而荒蠻夷  
 以麗足之賤奔走四海蹂躪諸國眦視跋履敢欲凌駕上國  
 何其驕也地之在中渾然無端宜如無方隅也然凡物莫  
 不有自然之形體而存焉而神州居其首故幅員不甚廣大  
 而其所以君臨萬方者未嘗一易姓革位也西洋諸蕃者當

其股脛故奔舟舸莫遠而不至也當時此類の文詩極りて多し

斯く民間の志士が熱心國事を憂ふるに當りて徳川政  
 府の大權は二百六十餘年間太平に夢を結びた、王侯  
 貴族の掌握せし所ありて彼等と固よりを最初徳川政  
 府と創立したる勇猛なる参河武士の子孫たりと雖も  
 徳川政府の太平を彼等として其精神より身体小至  
 きて全く柔弱ならしめたる其の平生交り所ハ多く  
 下臣のみなを以て外國の使臣に對するも敢て怯臆  
 することなく或は能く之を叱責す所の勇氣と有した  
 り者ありし然れども此輩固より外國交際の何もの  
 ことを知らずしを海關稅の何ものたゞは知らざり



何れも裁判權の何ものをも知らざりし通商交易の如何なる利益あるものたるやを知らざりし故に第一に開きたる談判を談判ありしに寧ろ説諭を受けしめあり今之を抗せんやせんや兵力に勝つべきか辨論の勝つべきかを諾せんよんか人民の忿怒せんよんを恐る是に於て徳川政府の企てたる第一の策を當時大に尊信を加へたる所は王室の威を藉り天子の詔を以て開港を行ひ以て一人人民に忿怒を鎮め一人外國の督促を緩ふせんと欲するありき從來天子の詔は常に徳川政府の欲をばさるべくなりき然るに此の如き方略は民間に傳播するや志士皆忿怒

慨歎の餘り寶刀難染洋夷血と諺ふものあり此心痛欲掃戎夷と唱ふものあり今一て尊攘を議せざるものあり其の國家の奸賊夷狄醜奴のみと論するものあり其極や殆んと全國各藩の志士の憂愁胸に迫りて家を捨て妻子と去り郷里と脱し生死とも顧みず嚴罰をも恐るは東西南北に奔走して偏に其熱心する所の攘夷の一論を徹せんと務りたりされし其論又縉紳の内に入ると王室の主義全く攘夷と決定せり而して徳川政府と之を翻さんと欲して幾回とれく開港の議を上りたると終に其意を達する能はざりき是時、當りて徳川十四代の將軍家茂尚幼にして一切



の政權皆大老井伊直弼の手あり此人王室に説くは  
為すべからず然知りゆきとて鎖港攘夷に迫り行ふ  
をうらとふと思ひまゝ王室の許さ、まも吾能く之  
を決行せん諸侯の服せしはも吾能く之に代壓服せん民  
間の志士の罵くもまも吾悉く之を盡殺せん今日の日  
本は處をも唯此一方ふありと決断し終り外國と假  
定約を結ひたし實に二千五百十八年なり  
天下の志士は此舉措を見て皆悄然とて恐れ忿然と  
て怒りて曰く徳川氏を吾人をして外國の奴隸たら  
しむふそのあり天子に命し背き日本國を陸沈せしむ  
るそのなりと器然之を非作て皆心と王室に歸せり

直弼謀して之を知り乃ち一網に打盡しつりとては世  
論益々之を怒り二百餘年人望の係り政府も復一人  
の之を慕ふまはなきに至り實に開港は止むを得ざ  
るを知り俊士と雖も亦之に服せざるその多うき  
此の如き時ふ當りて此の如き舉動を行ふ人の良死  
と遂々さふる社會代理なき故に直弼遂に私怨の為  
め小水戸藩士の手で死せり然れども彼既し徳川政府  
と一身と犠牲して外國と條約を結ひ以後如何なる  
鎖港論者の政權を執るも容易に之を決行する能は  
ざらざるを蓋し亦國家に大功ありと云ふべし  
是より先き天下の諸侯及び志士は徳川政府の終るに頼



むへうらふと見て皆悉く王室に向ひ之を據りて以て  
鎖港攘夷を行ひ我神國と為て夷狄の奴隸たるを免れ  
ちめんとせり是ふ於て直弼等私に思へらく徳川氏の  
人望と恢復し海内と為て静寧に歸さしむるは唯く公  
武と為て合体せしむるれ一事のみを則ち皇妹東下  
の議と奏せり直弼死すの後老中等庶政と一新し諸  
侯の妻孥と其國へ歸し且つ公武の合体を希望し終に  
將軍として上洛せしり諸侯と京師に集り天子に目前  
に於て閉鎖の一論と決せんと企てたり  
若し之を行ふの人として賢良ならんは斯の如き企  
ては當時に於て或も適合すはものならん然れども其

人の適せばは代如何せんや夫れ徳川氏に三代以後天  
下の政權を專握せしむるのて決して之が政權を執り  
しもの、賢良なきしに因りてありあり全く祖先  
に制定したる組織の完全なきに據りて彼れ關東形  
勝の地を據り諸侯の質を擁し之と大城の内を集りて  
以て抑制せしむるに因りて故に其静寧に歸したるも  
の心裏上の制馭を據りて寧ろ外形上の制馭を  
據りその多きなりとされ此の如き人と以て巍然たる  
大城の内と出て開豁する廣野の外を逍遙し數く公衆  
の耳目に接せしり威嚴地に墜ち政令遂に行つた  
ること防くべからざるの勢なり是時に當りて徳川



政府の内部も既に人材登用の論ありて復舊時の如きものもあらざり且雖も如何もせん未だ上位も居りもならずとも變改すべしに至らざるも故も其京師も出て他の諸侯と併列もせずや復外形上の威嚴以て其勢を添ふは其の外故も諸侯は服せしむるは勢力も上洛の時も當りて隱然消散せり況んや此時も當りて關西諸國の諸侯の如きも早く既も外國船突入の激動も感じて内部の改革を行ひ久く襲來せり門閥の弊を廢し憂國の志士を撰みて國事を任し之を之と應對の際も於てもら數々輕蔑を免ふはさりとて王室を以て徳川氏も合せしめんと志して企てたる將軍の上洛を

却て徳川氏を以て王室も屈服せしむるは媒とあり天子石清水も幸し自ら將軍も節刀と授けて攘夷と行はしむるの重大事件を發すは至り是時將軍病みて出づ能はず代理の人亦疾きて出づ能はず由りて其事遂も行これり徳川氏内部の醜体是に至りて全く世も發露せり

然れども此時も至りて王室も始めて攘夷鎖港の全く行ふは事と知らざるも之より先も水戸藩最も鎖港と主張し一搦又其議を贊し以て徳川氏の政略も抗したりとせり王室も二侯及び其他の諸侯も關東も下りて攘夷と決行せしめんとしたれども皆之を實行



とる能くさりき是も於て公武合体の目的始めて達す  
べき得て而して攘夷鎖港と主張する縉紳諸侯及び民  
間の志士大小勢力を失へり

然きとも徳川氏既に入望と失せり豈久しく海内を制

するを得んや公武共ニ開港の主義を執り小及びして鎖

港攘夷と主義とせり民間の志士私小兵を執りて政府

小抗を依るのありと松本謙三郎吉村虎太郎等中山忠光

郎但馬藩士の京師を騷擾するもれあり長州の人外船小戦ふ

諸侯の私ニ外國と戦ふものあり長州の人外船小戦ふ

て之を撃ち馬關と奪ふ之諸侯の内亂政府を煩はるも

あり先き薩州亦英と戦ふ諸侯の内亂政府を煩はるも

のあり水戸藩の内亂あり諸侯の内亂政府を煩はるも

と制取を不能くす而して外國又頻りに小償金を促し徳

川政府に過失を咎めたり凡政治の難此時より難き者

ありとす一而して此等の事ハ悉く之と鎮定するを得

たりと雖も更に一罅隙の乘るべき者を示せり

之より先き長州藩毛利氏數々徳川政府に命を抗した

り其所謂俗論黨ふもの恭順謹慎の意を致して多く

謀小興る臣下と誅せらるる為り小徳川氏を之と寛恕

せしむると雖も此時高杉晋作のその出づ自ら兵を起

して俗論黨を撃ち閩藩の議論を一新したる為り小

徳川氏を兵と發して之を滅せんと欲せり則ち従前の  
方法に因り一紙の命を傳へて地を割き若くは封と



移そとの能くふと察し征討の師と下きて勝敗を試  
みんとせり是時小當りて長州と既し外國と一戦して  
大小兵制と改めたりとれ其戦最も奇觀なりと鎖港  
攘夷と主張せし長兵ハ悉く洋式を用ひ輕装して銃砲  
と携へて開港と主張し徳川氏の命を奉りて攻寄す  
諸侯の兵は皆不元龜天正以來家傳の甲冑と着し鎧  
ひたし鎗を持ち瘠せたる馬も跨りて其勝敗知るべ  
きあり若し其れ徳川氏を去て全力と盡して之も向と  
とりて其長州と破るること必なり然し小此時家茂將軍  
死去し内外多事ふり為りし僅し長藩に諭して兵と  
退しりて一時を苟安せり

されど既し人望を失せし徳川政府も更し兵力は弱ふ  
ることと示やり故し茲に至りて徳川氏ハ既し己の政  
府たのむ権力と失ひしを因りて大藩外諸侯を勿論  
小藩譜代と雖も其命も従はざるもの多うりしはま  
土佐侯山内氏其臣として十五代將軍慶喜も説か  
て曰く泰西人來航以來物議紛然東攻西撃殆んと寧歳  
も恐らくも外國の輕侮と招かん是れ政令二途も出  
て天下耳目の属する所と異しすはる為り宜しく  
政權と王室も奉還し萬國と併立するの基礎と立つべ  
しと將軍其説被容れて政權を奉還せり  
然りと雖も徳川氏の封領を削りてうらやみ其臣下の多



と糧食の乏れ、海内固く之と比すくきふ。若し夫れ隠然關東に據りて唯く朝廷の命是を従ひたらんふら之と如何ともすゆ能はさ。然れとも薩長土等の藩臣は朝廷に權を專らふす。然見なうら其命を奉るも人情的の堪ふ能はさ。野のそのあらん終に伏見の變を發し一敗して關東に退たり。伏見の一戦を天下の向背と決したる如し然れとも徳川氏も尚ほ海内は強國をばを失つたり。其陸軍の如きも當時最も熟練せしものなき。海軍の如きも至るも他の諸侯嘗て之を有す。そのを而して徳川氏、開陽蟠龍回天以下數多し軍艦を有したり。伏見の

一敗を以て從來主要不當り。は身怯の俗物を排除す。これ幸機となりたる。一はこれを若し更に關左の兵を起して東海東山の二道と上り。やと天下は事未だ知る。一は加らば。なを然きとも。此時外患方小深く干戈と邦内不動をへ。この時、あるは故に將軍慶喜を勝安房大久保一翁の説を容れ自書臣下と戒めて曰く官軍は抗をばな。は官軍は抗す。ふそのは猶刃と吾に加ふ。う如きふりと即ち江戸城及び軍艦銃砲を朝廷に獻し。而して身其命を俟てり。さば。は。に堅牢ふり。徳川政府の組織も民間の輿論も抗し。は。う。為り。不。開港後僅九年して終に解体を。は。を。蓋し。當時の輿論



つり鎖港攘夷の一論の如きや何そ必ちも策の得た  
るもれならんや今日三尺の童子も尚ほ其非なること  
を知りて徳川氏も終始開港を是と志すまじし國家  
も大功ありと云ふべし然るも此の如き固陋なる輿  
論も尚ほ且壓服する能はずして却て自ら倒れし國  
家の大権を執るものありて此理を解せざるは徒  
ら社會も風波を生ぜんのと徳川氏の如きと好龜鑑を  
社會に遺したるを云ふべし

然れども外交一たび開きて而して徳川政府の制度を  
永遠に保持せんと到底望むべしなり蓋し徳川  
氏の制と諸侯及び人民の反亂を防ぐに於て最も緻密

なる所あり故に二百五十年の久き一諸侯の叛くも  
のあふなり然るも海内連合して外敵に向ふれば時  
に至りては封建制度の區畫全く無用のもれなり古  
語に曰く同舟颯々逢へば吳越相救ふと故に秦兵強き  
時を六國連合し佛兵強きときは英日連合す其連合の  
時不當りてや固より六國なく英日なきは外船は  
突入するや日本人民の恐怖せしと實に非常なり故  
に封建の令子を此時早く既し破滅し彼の族を重ん  
ぶの習氣全く社會と去れり諸侯の内部に於ては皆改  
革を行ひ皆日本國を思ふの人をして藩政を司らる  
たり此時不當りて此等の人々の心裏復其君に忠を盡さ



んとの念ありとふり其藩は愛するに念ありはるる  
て全く日本國をのみ憂ひて少く更に勤王の志と存  
せしものなきに此の如き人物を豈是れ封建の人ならん  
や全く郡縣の人ならふりこれに徳川政府を滅したる  
と外面しては封建諸侯の力ぬらふ如く思ふれども  
其實は愛國の志士封建は遺物たる一團結に因りて其  
目的を達せしありこれを徳川政府の滅せし後四年ふ  
ちて明治政府を遂に封建を廢して郡縣と為さしと雖  
も海内一人の其君不忠なるものありて之に抗せしは  
となく蓋し之を聞く封建制度は盛んふりや人民愛藩  
の念ありて愛國の心なり敵國外患の強きや愛國の心

ありて愛藩の念ありと今に徳川氏に未路愛國の心あ  
りて愛藩の念なきを見れば則ち徳川政府の滅する所  
以ち封建の滅すは所以なりを知りし然らば則ち其  
滅するや命なり何そ必も責を一二執政者の過失に  
歸すべけんや



日本開化小史卷之六終

跋

馮少

明治復績。百度皆新。天下之事。率取法於西國。獨史籍之體。全仍舊貫。雖浩何補。吾友鼎軒田口君。夙通經濟之學。觀史者。不暇。嘗慨古今史乘之無



益世道。做西國開化史。著此編。以論我國文物之所以旺。盛者為其博識卓見。非尋常史家之所能及也。嗚呼。此編也。僅數卷耳。而謂浩也。然擴而充之。可以歷倒萬卷矣。可以涵氣天下。其盡以

其平素所蘊蓄者。溢而為史也。然則親斯書者。謂君善以學成史。則可。謂君善以史成學。則不可。

明治十五年三月七日

香亭 中根淑識





明治十一年二月廿六日版權免許  
同十五年十月出版

著述無出版人

静岡縣士族

田口

卯

吉田

東京牛込區牛込北  
山伏町四十三番地

卷之六

# 東京 書林 賣捌

日本橋通二丁目	北	畠	茂	兵衛
同通二丁目	稻	田	佐	兵衛
芝三島町	山	中	市	兵衛
淺草茅町三丁目	北	澤	伊	八
小石川大門町	青	山	清	吉
日本橋通三丁目	丸	屋	善	七
同通二丁目	小	林	新	兵衛



